

境町歴史民俗資料館だより

# 河岸町の歴史

## 境の俳人

## 箱島阿誰

はこじまあすい



箱島秀昭家文書 掛軸 安政3年 仲春 翠山

2021. 11  
Vol. 14

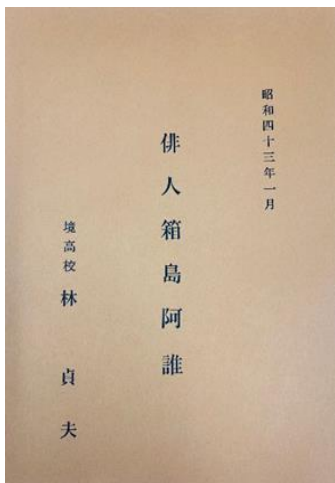
### 与謝蕪村と共に学んだ箱島阿誰

与謝蕪村は松尾芭蕉、小林一茶と共に江戸時代を代表する俳人の一人です。

今号で取り上げる「箱島阿誰」は、この「与謝蕪村」と共に俳諧※を学んだ、言わば蕪村の同級生です。

どういふことかと申しますと、阿誰と蕪村は、元文二（一七三七）年から元文三（一七三八）年のほぼ同時期に宋阿（早野巴人）という俳諧師（俳諧を職業とする人）が号した、江戸日本橋の「夜半亭」に弟子入りしたからなのです。

阿誰二八歳、蕪村二二歳のときでした。  
※江戸時代には「俳句」という言葉はなく、「俳句」は明治になって生まれた言葉です。（連句（後述）をふくめ「俳諧」と言いました。）

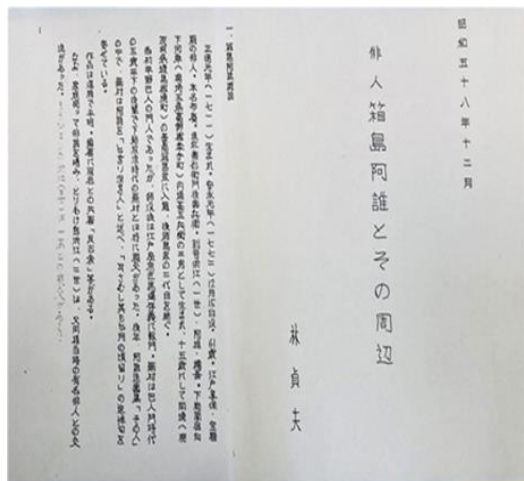


## 箱島阿誰について

箱島阿誰について最初に研究されたのは、林貞夫先生です。林先生は地元県立境高校で教鞭を取りながら、一九六八年一月に『俳人箱島阿誰』<sup>1</sup>を、その後一五年の歳月をかけて一九八三年一二月に『俳人箱島阿誰とその周辺』<sup>2</sup>を完成させました。現在も林先生のこれらの著書は、北関東の俳諧の研究に欠くことのできないものです。

ここで箱島阿誰と言う人物についてお話しします。本名を「箱島善兵衛布慶」(阿誰は俳号の一つ)、正徳元(一七一二)年に関宿向下河岸(現幸手市西関宿)に生まれましました。そして享保一〇(一七二五)年、一五歳の時に関宿藩の御用商人として栄えた穀問屋箱島家の養子となり、後に箱島家の二代目を襲名、安永元(一七七二)年、六二歳で没しています。

では、阿誰はどういう経緯で俳諧を始めたのでしょうか。



## 阿誰と俳諧のかかわり

関宿・境の俳人が、まとまって登場する俳諧選集(複数の俳人の句を集めた句集)に、享保二〇(一七三五)年と翌享保二二(一七三七)年の慶紀逸編『平河文庫』があります。<sup>3</sup>阿誰はここには登場しませんが、これにより当時から、関宿・境の多くの人々が俳諧をたしなんでいたことがわかります。ただ、多くの人々といっても、それは裕福な商人たちが主でした。俳諧は裕福な商人たちが関宿藩の藩士たちと付き合うための方法の一つだっ

たからです。

阿誰と共に宋阿に弟子入りしたと思われる文楼も、境の二大河岸問屋の一つ、青木兵庫家の当主でした。この青木兵庫家はそれだけではなく、大名や老中などに宿泊の場を提供する「本陣」も勤めていたのです。<sup>4</sup>

## 阿誰と蕪村のかかわり

「郢月泉のあるじ巴人庵の門に入て、予とちぎり深き人なり。ことし末の冬中の五日、なきひとの数に入ぬときよとて

耳さむし其もち月の頃留り 夜半亭蕪村」<sup>5</sup>  
上記は浙江(阿誰の長男、箱島家三代目当主吉兵衛敬有)が刊行した父の追悼集『その人』の中に収められた蕪村の句です。「内一行目に記された郢月泉も阿誰の俳号の一つ」(ここから蕪村が、夜半亭で共に学んだ郢月泉のあるじ)阿誰を自分と縁の深い人と考えていたことが分かります。

では阿誰と蕪村はどのように縁を深めたのでしょうか。その一つに「連句」※という共同作業があります。

二人は田鶴樹編『西海春秋』と雁宕・阿誰編『反古ぶすま』という二つの句集の中で共に同じ連句に参加していました。連句とは、簡単にいえば「五・七・五」の長句と「七・七」の短句をそれぞれ複数の作者で詠み繋いで完成させる、言わば共同作業の作品です。特に『西海春秋』に収められた連句三六句（これを歌仙といいます）では、書簡で届けられた最初と最後の三句（田鶴樹と朱令）を除く三三句を、阿誰と蕪村の二人で詠んでいるのです。

関東下総連中

「花盛散るとおもへば寂しけれ 阿誰  
川かげの一株づゝに紅葉哉 蕪村」<sup>6</sup>  
今は盛りの花々も時がたてば散ってしまう  
と思うと寂しいものだ。と詠んだ阿誰の句を受けて、蕪村は秋になって川かげに点在する紅葉も鮮やかではないか。と返したのでしょう。  
これらから『関東俳壇史叢稿 庶民文芸のネットワーク』の著者である加藤定彦氏は

「延享初年の晩秋、境に来遊した蕪村が阿誰らとの句稿を田鶴樹に送り、さらに返送された連句を蕪村・阿誰の両吟で継ぎ、再び田鶴樹のもとに送り、満尾したものと推定される」<sup>（前出<sup>3</sup>）</sup>と述べています。  
これだけでも、二人の親しさを十分に示していると言えるでしょう。

### 蕪村の阿誰邸滞在の可能性

阿誰邸には宋阿没後に阿誰が師事した存義をはじめとして、多くの俳諧師が滞在していたことが書簡から分かっています。<sup>7・8</sup>  
さらに前述の通り蕪村が境に来遊したと推定されていることを踏まえれば、蕪村が阿誰邸を訪れるのは当然と思われれます。

### 阿誰の句集

箱島家では阿誰だけではなく、阿誰から三代に渡り、それぞれの当主とその妻から子に至るまで、いわば家族総出で俳諧をたしなんでいました。こうしたことから、前述の『西

海春秋』をはじめ、阿誰やその家族の句は多くの句集に入集しています。

箱島家が刊行した句集も、共著をふくめ五冊存在します。まず、阿誰が刊行した句集二冊を上げると、宝暦一（一七五二）年、宋阿門の兄弟子であった結城の雁宕との共著で『反古ぶすま』（前述）、二年後の宝暦四（一七五四）年には『なるべし』<sup>9</sup>があります。その後阿誰の長男である浙江（前述）が『その人』（前述）、『果報冠者』<sup>（前出<sup>5</sup>）</sup>を刊行しています。

後者の『果報冠者』は、阿誰没後三年の安永四（一七七五）年、初夢に白鷺（白いダチヨウ）を見たことから浙江が俳号を「閑鷺」に改号、その記念の句集として刊行したものです。（閑鷺は『果報冠者』刊行の翌年麻疹のため死去）

そして閑鷺の長男である文路（箱島家四代目当主忠右衛門徳候）<sup>（のぶよし）</sup>による、父閑鷺追善集10（題名不明）も安永六（一七七七）年に刊行されています。

## 若き日の蕪村を支えた人たち

師宋阿を亡くした蕪村は、結城の雁岩の呼びかけにより、その後九年に及ぶ年月をかけて北関東を来遊します。二七歳から三六歳のときでした。来遊後、蕪村は寛延四〇宝暦元（一七五二）年京へ出立し、晩年までを京で過ごします。

安永四（一七七五）年に閑鷺が刊行した『果報冠者』（前記）には、京から蕪村が句を寄せており、翌安永五（一七七六）年には、「右之閑鷺は愚老旧識にて、甚之豪家ニ而候」（前出）と箱島家について、その記憶を書簡の中に記しているのです。

このとき蕪村は六一歳になっていました。俳諧だけを取り上げれば、阿誰の句を目にした人はほとんどないでしょう。しかしながら阿誰は俳諧をきっかけに「与謝蕪村」を助けるという功績を残しました。阿誰が『西海春秋』（前記）で蕪村と連句を詠んだのも、北関東来遊中の、蕪村が三三歳のときでした。もちろん、阿誰一人が蕪村を助けたわけではありません。結城の雁岩（前記）をはじめ

として、同じく結城の晋我<sup>しんが</sup>、下館の風篁<sup>ふうこう</sup>など北関東の裕福な俳人らが、蕪村を経済的にも精神的にも支えたのです。

蕪村の生い立ちについて不明な点は多々ありますが、晩年に近い頃弟子に送った書簡に、故郷への「やるかたなき」思いが記されています。（前出） そうした蕪村にとって、父のように慕った師宋阿亡き後の北関東の阿誰らは、もとより兄に近い存在になったのかも知れません。

一七〇〇年代の境河岸の繁栄について、すでにご存知の方も多くいらっしやると思いますが、境河岸のみならず北関東の豪商といわれた人々が経済活動と並行して、俳諧をたしなみ、それによって俳諧の発展に貢献していたことは、わたしたちの誇りと言っていないではないでしょうか。

（境町歴史民俗資料館 佐藤淳子）

## 参考文献

- 1 林貞夫著『俳人箱島阿誰』私家版 一九六八年一月
- 2 林貞夫著『俳人箱島阿誰とその周辺』私家版 一九八三年二月
- 3 町史研究第九号「下総さかい」町史編さん委員会 二〇〇四年三月（加藤定彦著『関東俳壇史叢稿 庶民文芸のネットワーク』若草書房二〇一三年一月）
- 4 椎名仁著『境河岸―利根・江戸河岸の要衝―』筑波書林 一九八二年二月第一刷発行
- 5 桜井武次郎・藤田真一・清登典子校注『蕪村全集第八巻 関係俳書』講談社 一九九三年三月第一刷発行
- 6 田鶴樹編『西海春秋』刊三巻 寛延一（一七七六）年 国立国会図書館 マイクロ請求記号 三三五―一五五
- 7 尾形仿・中野沙恵校注『蕪村全集第五巻 書簡』講談社 二〇〇八年一月第一刷発行
- 8 天理図書館報『ピプリア五〇』天理図書館 一九七二年三月
- 9 加藤定彦・外村展子編『関東俳諧叢書 第一四巻』常総編② 関東俳諧叢書刊行会 一九九八年二月印行
- 10 早稲田大学古典籍総合データベース「閑鷺追善集」文路編 早稲田大学図書館